

けいざい  
新話  
SHINWA

群馬県内の開業医の家に生まれた内田毅彦(45)は、父と同じ医者道を歩んだ。福島県立医大に進み、卒業後は東京女子医大などで研修し、同大の循環器内科助手に就いた。

順調に専門医を目指したが、日本の医学界の欠点が目についた。患者を診て、適切な治療法を選ぶには、たくさんの事例をデータ解析し、研究する臨床研究が必要だが、日本はその分野で遅れていた。「米国でのデータによれば……」と患者に説明せざるを得なかったのだ。

臨床研究のために統計学などを学ぼうと渡米し、2002年ハーバード大学公衆衛生大学院で疫学修士号を取得し

## 医者から轉身 機器開発の道へ

## 「神の手」とつくる ②

た。その後も研究員として残り、心臓の冠動脈疾患の臨床研究や医療機器の開発などを手がけた。

その過程で、米食品医薬品局(FDA)に出入りし、日本との差を痛感した。FDAでは多くの医師が審査官として働き、新しい機器を開発した医者やメーカーとアカデミ

ックな議論が交わされていた。〈魅力的な世界だ〉と内田には映った。

ハーバードの恩師の勧めもあり、05年に日本人で初めてFDA医療機器審査官に就いた。

米国では医者が、自らの使い勝手がよく、患者のためにもなる医療機器の開発に積極的に関わっていた。医療機器開発に詳しい人材や、投資家などのネットワークを持

つ人たちが協力する風土もあった。日本にはない仕組みだった。

専門医としての道を開く選択肢もあったが、内田は別の道を選んだ。〈医者として一人一人の患者を救うのも尊いが、多くの患者を救うことができる機器開発に関わることが

も大切だ〉。機器開発の重要性に気づき、先進地の米国で経験を積んだ自分しかやれないと思ったら、もう踏み出すしかなかった。

尾崎に会ったその日、心臓から全身に血液を送る大動脈弁を、患者の身体の一部を使って再現する手術法を聞いた。〈すごい手術だ。この手術を世界に広めたい〉。内田は居ても立ってもいられなかった。

九州大農学部を卒業し、バイオベンチャーを立ち上げていた旧知の石倉大樹(32)を「日本で医療機器のイノベーションを一緒に起こそう」と

口説き、経営企画室長に迎えた。大手商社を辞めた若者たちも迎え、総勢5人になった。



日本医療機器開発機構のメンバーたち。右端が内田毅彦社長。手前は心臓外科手術用の医療機器。東京都中央区東日本橋

FDAで2年働き、米大手医療機器メーカーに転じ、11年に退職。12年9月、日本医療機器開発機構(JOMD)を設立した。ちょうどそのころ、早稲田大で医工連携を進める梅津光生研究室で偶然会ったのが、心臓手術で

「神の手」を持つ東邦大教授の尾崎重之だった。そしてもう一人の「神の手」が、サポート役を買って出た。内田が米FDAで働いていたところに知り合った東京慈恵会医大教授の大木隆生(51)だった。

敬称略 (編集委員・安井孝之)

この連載へのご意見は、keizai@asahi.comまで。